

貝原益軒の養生論から見た非認知能力の思想的意義

— 乳幼児の育ちにむけての一考察 —

高野 暁子

要 旨

近年、保育・幼児教育の分野では、子どもの育ちの重要な要素として、非認知能力に光が当てられている。だが、関心が高まる一方で、この力の意味や特性については、曖昧な点が少なくない。

そこで本論は、貝原益軒（1630-1714）の養生論を手がかりにして、保育・幼児教育における非認知能力の思想的意義の一端を検討する。本論は特に、益軒の学ぶ姿勢に注目していく。

益軒の養生論における学びとは、養生に関するあらゆる「術」を学ぶことであった。その「術」は、一つでも欠けてしまうと身体に影響が出てしまうため、すべてを学ばなければならないと彼は言う。しかも、養生は実践に移さなければ意味がなく、一人ひとりがその場の状況に対して臨機応変に「工夫」して実行することが肝要だとされた。

だが、益軒が考える養生の実践者とは、己の内に行動指針があるような自律的な個人とは違い、命の源である天地に自らを合わせていけるような人を指していた。

益軒の養生論における学びの姿勢は、非認知能力の意義や価値基準を検討する手がかりになる。今後は、一つひとつの養生法とその理念を考察することで、非認知能力に関する理解が深まると考えられる。

1 はじめに

近年、保育・幼児教育の分野では、子どもの育ちの重要な要素として、非認知能力に光が当てられている。関連する雑誌に特集が組まれ、解説書や専門書が刊行されるなど、今や非認知能力は一つの潮流をなしつつある。だが、関心が高まる一方で、この力の意味や特性については、曖昧な点が少なくない。

そこで本論は、日本の教育思想を手がかりにして、保育・幼児教育における非認知能力の思想的意義の一端を検討することを試みる。その際参照したいのが、江戸期の儒学者貝原益軒の養生論である。後で述べるように、身体を健やかに保つための知恵と工夫の総体である養生は、非認知能力の枠組みに含まれる要素とつながる点が多い。時代の流れに即して言えば、先行する江戸期の養生論が21世紀の保育・幼児教育の理念の歴史的基盤となりうるということである。そうした養生論の中でも、本論が注目する益軒のそれは、当時

の著作群の中でも質・量ともに傑出しており、世に出てから現代に至るまで大きな影響力を持っている。

以下ではまず、非認知能力をめぐる先行の研究を概観した上で、この概念の理解の手がかりに益軒の養生論を位置づける意義を確認する。続いて、益軒養生論の内容を、彼の学びの姿勢から検討し、そこで確認される非認知的な活動の思想的な特性を抽出する。最後に、益軒養生論の特性を現代の非認知能力との関わりから整理し、保育・幼児教育における非認知能力の意義と可能性に言及していきたい。

2 非認知能力をめぐる動向

欧米では、人生の成功や社会経済的発展をもたらす要因として、これまでテストの成績などで示される認知能力が重視されてきた。だが、その見方に変更を迫るような研究結果が教育経済学を中心に報告されている。その代表に挙げられるのが、アメリカの経済学者J.ヘックマンの研究とOECDのレポートである。

ここでは、ペーパーテストで測定可能な認知的な能力あるいはスキルが、その人の人生の成功やウェルビーイング (well-being) にとって持続的な効果をもたらさないことが明らかにされるのと同時に、従来のペーパーテストには馴染まない内面的な性質が、人生の土台を育むと結論づけられた¹。

このペーパーテストに馴染まない内面的な性質を、ヘックマンは非認知能力と呼び、OECDは社会情動的スキルとしたのである。その中身は多様であるが、たとえばヘックマンは、根気強さ、意欲、長期的な計画を実行する能力、他人との協働に必要な感情のコントロールなどといった心の力を挙げている²。

さらにこれらの研究は、非認知能力を育成する有効な時期が幼少期であることも指摘している。まずは人生のはじめの段階で非認知能力の基盤づくりをしておくことが、その後の人生に対してプラスに働くということである。

以上のような動向を受け、日本の保育・幼児教育の世界でも、非認知能力が多く取り上げられてきた。たとえば、遠藤利彦を代表執筆者とする報告書「非認知能力（社会情動的）能力の発達と科学的検討方法についての研究に関する報告書」が2017年に発表された他、『子ども学』『発達』といった保育・心理学の雑誌でも非認知能力の特集が企画され、理論的実践的な論考が集められている³。

個々の研究の眼目や手法は一様ではないが、主として、乳幼児の発達に関する考察、保育現場での意識調査と実践報告、保育所保育指針・幼稚園教育要領との関連についての整理などがなされている。いずれも、子どもの非認知能力の育ちを支えるための理念や方法をより明確に描き出すことが目指されている。

こうした研究上の関心の背景にあるのは、非認知能力の扱い方についての課題意識である。日本では、認知能力の効果に注目していた欧米と違い、乳幼児期における非認知的な力を重視してきた。にもかかわらず、実際にその力を育てようとする時になると、何をどのようにしていけば良いのか、具体的な方向性が見出せていないといった課題が指摘されている。非認知能力が多様な要素を含む心の性質の総体であることに加え、そこから特定される具体的な中身はその人が属する社会によって異なってくるという点が大きく影響

し、子どもを育てる段階で共有されるべき価値基準が見えにくくなっているのである。

そこで、本論では、よりよい人生の過ごし方を説いた思想家として貝原益軒に注目し、とりわけ彼の養生論を手がかりに非認知能力の思想的特性を検討していきたい。

益軒は、儒学者として当時の哲学上の課題に取り組み自説を展開しただけでなく、自らの知識を「民生日用」にするべく多数の著作を著した。その分野は幅広く、学問論、道徳論から本草学、家政学、子育て論など実に多様である。

その中で、本論が注目する養生論は、健やかな身体づくりを目指して自らの心身を調整するための方法を述べた理論である。したがって、そこで主眼となるのは、病の予防や長命の保ち方ではあるのだが、実際にはさらに広汎で、衣食住のあり方、日々の保養や趣味など生活全般に及ぶ。

中内敏夫は、益軒養生論が、今ある社会の中で人がよりよく生きることを目指した理論であると述べ、それを社会の維持に人を従わせる「教化」とは明確に区別した⁴。中内によれば、日本の「教育」のはじまりは、江戸期の養生論の形をとって現れるという。

このような位置づけを踏まえると、益軒養生論が、非認知能力の思想的意義に対して重要な示唆を与えてくれるように思われる。ここで、彼の思想を検討することは、現代の保育・幼児教育にとって重要な視点を、より明確な形で見出すことにつながるのではないだろうか。

3 貝原益軒の略歴と養生論

貝原益軒は、寛永七(1630)年、筑前国黒田藩の祐筆であった寛齋の5番目の子として生まれた。十四歳の時に次兄の存齋から四書五経を学び、十九歳で黒田藩に仕えた。理由は不明ながら、まもなく浪人となり、その間に医術を修め、数年後には藩医として復帰した。藩命により京都に遊学し、朱子学や本草学を学んだ後、藩の儒官となって活躍、七十歳を過ぎるまで藩の役目を果たしたとされている。その後は「民生日用」に向けた著作の執筆を中心に活動し、正徳四(1714)年に没した。

彼は、当時の他の儒者たちとは違い、独自の学派をつくることなく、自らの学問の大半を著作の出版という形で世に広めた。彼が生涯にわたって著した著作は約百部、二百七十余巻にも及んだという。その多くは、藩儒官を退いた晩年に書かれたものである。

この中で養生論に当たるものは、弟子の竹田定直に和漢の養生説を編集させた『願生輯要』なる書の「叙」と正徳三(1713)年に著された『養生訓』である。しかしながら、後者は前者をもとに、益軒自身の知見を加えた書であることから、益軒養生論の全般的な内容は、この『養生訓』に収められているとされる。

本論でも、この『養生訓』を中心に関連する文書を加えながら、彼の養生に関する考えを探っていく。だが、ここでは、非認知能力に着目するという観点から、まずは益軒の学ぶ姿勢を見ていくことにしたい。彼は、自らも養生をよく学んだが、それと同時に、人々に対しても養生を学ぶよう強く勧めた。養生において、学びは必要不可欠だった。では、益軒にとって学びとは何だったのだろうか。

4 益軒の学問論

益軒の学問論は、彼の思想全体を理解する上で重要であり、これまで江戸期の儒学研究や益軒研究を中心に論じられてきた。それら諸研究において鍵とされているのが、氣の思想に基づいた理氣論である。

理氣論とは、朱子学の根本原理である理と氣をめぐる哲学であり、朱子以後の儒学者にとって必ず向き合うべき基礎理論であった。

理とは、「自然の秩序ないし組織の原理⁵」で、知覚を超えた形而上の存在である。これが人にそなわると「性」となり、道德性といった価値理念の問題として論じられることになる。一方、氣とは、「自然的世界を構成する基体⁶」であり、氣が凝集すれば有形の物、発散すれば無形となる。人が知覚できる形而下の世界はすべて氣の世界であるとされている。

朱子は、理と氣を厳密に区別する理氣二元論の立場をとった。この世界は、氣のめぐりや変化によって成り立つ物質的部分だけでなく、その上に知覚不能な理という別の原理が合わさって存在するのだと説明されるのである。

だが、益軒はこうした朱子の理論に疑問を持ち、自らの考えを『大疑録』という書にまとめた。正徳三(1713)年、益軒最晩年に著され、彼の没後に刊行されたこの書は、刊本には採られなかった初稿本も含めて、理氣二元論への疑義が論点となっている⁷。

では、益軒はそこでどのような理氣論を展開しようとしたのか。刊行された『大疑録』巻之上において、益軒は次のように言っている。

「一陰一陽、これを道と謂ふ」。両の一字は、これ一氣の動静、一は陰となり、一は陽となる。循環窮まりなきの謂なり。陰陽の流行は、往来迭ひに運りて、息ざるの妙なり。竊に謂ふに、聖人の一の字を以て陰陽の上に加へしは、これ必ず深意あらん。所以の二字加へざれども、意自ら足る⁸。

ここで益軒が言及している「一陰一陽、これを道と謂ふ」とは、『易』の繫辞上伝に出てくる言葉である。中国北宋時代の儒学者、程伊川はこの『易』の言葉を解釈する際、「道は陰陽にあらず。一陰一陽する所以が道なり」と説明し、この世界の原理を具体的な事象に見るのではなく、その背後にある「所以」すなわち条理に見ようとした。朱子はこの説を受け入れ、自らの理論を展開したのである。

ところが益軒はこれに反対する。彼によれば、「一陰一陽」とは天地にあまねく広がる一つの氣の動静である。世界はこの氣の運動・変化のうちに構成されるのであって、それ以外の何かがあるわけではない。そのため、程伊川が説明するような、一陰一陽の「所以」は必要なく、単に一陰一陽、あるいは一氣の動静で説明可能だとされる。つまり、益軒は、この世界を「物質的基体」としての氣一つで捉えようとしたのである。

では、益軒は理氣論のもう一つ概念である理をどう解釈するのだろうか。彼は言う。

道はこれ陰陽の流行、純正にして条理あるの謂にして、これ陰陽の本然、紛乱せざるものなり。理はこれ氣の理なれば、理と氣は分かつて二物となすべからず。且つ先後

なく離合なし。故に愚患へらく、理と気とは決ず是一物なりと。朱子の、理気を以て二物となすは、これ我が婚愚の、迷ひて未だ信服する能はざる所以なり⁹。

益軒は、先に確認した朱子の理気二元論を批判し、明確に理気の一部を主張した。「理は気の理」というように、ここでは、理は気に内在する法則性だとみなされる。彼のように、世界を、天地の気のめぐりによって構成される物質の世界だと解釈すると、具体的な事象以外に世界の原理を見出すことはできない。したがって、理は、気とは次元の違う形而上の存在ではなく、あくまで形而下において人に知覚されうる対象として措定されるのである。そこでは、「理は気の理」と解釈され、気に包摂されていく。気という「物質的基体」のめぐりに自ずとそなわる法則性が、益軒が考える理と気の関係であった。

ただし、既に指摘されているように、益軒のこの理論は決して特異なものではなく、中国明代において論じられた気の哲学の一環だと考えられる¹⁰。すなわち、益軒の朱子への大疑は、彼によって初めて世に出たわけではなく、それ以前から展開されていた儒学思想史の一つの流れに他ならない。

だが、独自性がないにもかかわらず、益軒が繰り返し理気一元論を説いたところに、彼の思想上の力点を読み取る見方もある。辻本雅史は、益軒の学問上の立場について、「理気論をぬきにしてはみずからの儒学説（思想）を語りえなかった」として、彼の関心が道徳的な「道理」ではなく、客観的な「物の理」の究明に向かっていたことを指摘している¹¹。

こうして益軒は、自らの学問の主軸を、すべて知覚可能な気の世界に見た。注目されるのは、このような朱子学からの転回が、益軒の学びの対象と学ぶ姿勢を特徴づけているということである。

益軒は、複数の著作の中で自らの学問観を語っているが、その代表としてまず挙げられるのは、朱子学の重要概念である「格物窮理」である。たとえば、益軒の文集である『自娛集』の「格物説」において、「物に即て理を窮むる¹²」と言っているように、益軒は一つひとつの物に即して探求することを学問の主眼とした¹³。彼は、「物の理」を各自の心の問題として説く陽明学や、物ではなく事の善悪の探求にひたすら向かっていく当時の朱子学者山崎闇斎を手厳しく批判し、物に即した知識の蓄積を主張している¹⁴。彼の学問的関心は、目の前に広がる世界に向けられ、そこにある個別の物へと注がれるのである。

だが、実際に「廣大無窮」なる「物の理」をすべて探求することは難しい。益軒は、自らの学問論を集めた『慎思録』の中で、次のようにも言う。

大凡古人の書を見るに、今人の言を聞いてその義理の当否を知るに、三証あり。これを聖經に考えて謝らざる一なり。これを天理万物の理に比してもとらず、二なり。これを我が心の良知にかんがみて疑いなし、三なり。よくこの三のものをもって義理の当否を試みれば違はざるに近からむ。三の者の中、これを聖經に考えるはすなはちその本なり¹⁵。

益軒の中では、「聖經」に基づいて考えることが第一であり、天地万物の理や自身の心

にある良知に従うことはその次に位置づいていた。つまり、古のすぐれた書を読むことが学問的探求にとって不可欠だとされるのである。

しかし、このことは、益軒の関心が「聖經」のみに向かっていることを意味しない。松村浩二は、益軒が「聖經」の内容を「大略」と見なし、その詳細については歴史的に積み重ねられた儒者の諸説を参照するよう主張している点に注目し、そこに「物の理」の探求と合わせて多様な知識を求める彼の「博学」の思想を読み取っている¹⁶。学びの対象や領域にこだわることなく、種々多様な知識に通じていることが、益軒の学びの姿勢なのである。それは、この世界に存在するあらゆる物を理解するための不可欠の方法だった。

以上のように、益軒は学問的な視点を、天地の気のめぐりによって成り立つこの世界と、そこにある一つひとつの物に振り向け、古今の知識を集積する「博学」的な姿勢をとった。彼にとっては、直接物にあたりその「物を窮むる」ことも、古今のすぐれた書を読むことも、いずれもが重要な学びのあり方だった。こうした益軒の学問観は、彼によって開かれた一つの学問領域だと言われている。その独自性は、益軒の思想に通底し、彼が取り組んだ数々の著作にも表れている。

5 養生論における学びの姿勢

これまで確認してきたように、益軒の学問論の基盤には、天地間のあらゆる物に関心を向ける学びの姿勢があった。

上記を踏まえて次に問題となるのは、こうした学問観が、彼の養生論とどのように関わるのかということである。そこで、ここからは、益軒の養生についての記述に注目していこう。

『養生訓』には、養生を学ぶことの重要性が繰り返し説かれている。たとえば、「先古の道をかうがへ、養生の術をまなんで、よくわが身をたもつべし」、「不急なるつとめは先さし置いて、わかき時より、はやく此術をまなぶべし¹⁷」などといった言い方がなされている。「養生の術」とされている点に注目したい。

益軒にとって養生の学びとは、具体的には養生の「術」の学びを指していた。彼は養生を「術」の一環だと見なし、その上で養生の「術」を学び習得することを強く主張していたのである。ここでは、長命を実現するために必要な「術」の学びが極めて重要な意味を持つ。

それでは、益軒が重視する「術」の学びとはどのようなものなのだろうか。『養生訓』の中で、彼は次のように説明している。

人の身のわぎ多し。その事をつとむるみちを術と云。万のわぎつとめならふべき術あり。その術をしらざれば、その事をなしがたし。その内にいたりて小にて、いやしき芸能も皆その術をまなばず、そのわぎをはらはざれば、その事をなし得がたし。たとへば、蓑をつくり、笠をはるは至りてやすく、いやしき小なるわぎ也といへども、その術をならはざれば、つくりがたし¹⁸。

益軒によれば、「術」とは人が自らの「わぎ」（業）に従事するための道のことをいう。

ここでは、「蓑をつくり、笠をはる」ことが「わざ」の一例として言及されているが、実際はそれだけではなく、農夫の耕作や医者の治療など様々な仕事や生活上の活動が想定されている。したがって、「わざ」をつとめる「術」とは、このような様々な仕事のための適切な方法のことだと言ってよいだろう。益軒は、こうした「わざ」のための方法について、よく学ぶよう説いているのである。

「人の身は天地とならんで三才とす。かく尊とき身を養ひ、いのちをたもつて長生するは、至りて大事なり。其術なくんばあるべからず¹⁹」。養生の学びは、三才の一つである人身を養い長命を保つ方法を学ぶことを意味するのである。

この養生の「術」に関して、益軒は、『自娛集』に収められた「長生有術論」なる文書の中で、「飲食を節にし、起居を時にし、外邪を防ぎ、内欲を寡なくする」ことを挙げている²⁰。衣食住に気を配り、人身に悪影響を及ぼす気候の変動を防御し、不養生の元になる欲望を節制する。益軒が掲げる養生は、こうした「術」を基本としている。だが、これはあくまで大略であって、実際は「生を養うの道、亦術多し」と彼は注意を促す。さらには、「其の節目の詳審」を論じようとしても「数言にして尽くすべからず」といった状態であった²¹。

このように、養生の「術」は無限にあると益軒は言う。だが、一つの知識でも欠けてしまうと身体に影響が出てきてしまうため、養生に関することはすべて学ばなければならないとされる。

ここには、既に確認した、天地間のあらゆる物に関心を向けて学ぼうとする益軒の学問論が垣間見える。養生に関するすべてに通じることは、世界にあまねく広がる物一つひとつに精通していく学びの重要なあり方に他ならない。彼の「博学」思想は、養生という一つの分野においても貫かれていると言えるだろう。養生の学びは、広汎で際限がないほどではあるが、それらを学び長命へとつなげることが何よりも肝要だとされるのである。

このような益軒の立場からは、江戸期儒学の学問観における一つの転換が認められるという。辻本雅史は、当時の朱子学が「動機の純粹さを重んじ、功利主義を排する立場から、術策の意味合いをとともなう『術』を学問から排除する傾向にあった」と述べ、「術」重視の益軒の学問観がそれらといかに違っているかを指摘している²²。朱子学において、学問とは、あくまで経史の学問であって、「術」を学ぶことは末端のことだと考えられていた。益軒もまた、その学問観の中に生きていたことは確かである。にもかかわらず、益軒は「術」の学びを養生の中軸に据えた。つまり、益軒の「術」を学ぶ姿勢は、学者としての明確な立場の表明であり、「術」を学ぶという学問のあり方を開いた証であるということだろう。

ここまで確認したように、益軒は天地間のあらゆる物に目を向けるのと同様に、養生という「わざ」のための「術」を学ぶ重要性を説いた。それは、益軒にとって養生が何よりも実践の学であることを表している。彼は『養生訓』の中で、「もし、養生の術を力まんで、久しく行はば、身つよく病なくして、天年をたもち、長生を得て久しく楽しまん事、必然のしるしあるべし」と言っている²³。春にまいた種を夏の間によく養えば、秋には必ず実多くなるように、養生も継続的に実践することが重要であるという。

養生は、いかに「術」を広く学んだとしても、それが実行に結びつかなければ長命にはならない。知っていることを実行に移してこそ、養生の学びが実現されるのである。した

がって、養生の「術」は、単に知識として持たれるだけではなく、行為として発揮されるべきものとして想定されている。それは、知識と行為とを結びつける方法上の知恵だと考えるだろう。養生を学ぶ人は、「術」として知りえたことをそのままにせず、実際に行動に移すまでを学びとして「わざ」に努めることが必要だとされるのである。

このような「術」の特性からは、養生における行為主体の重視が明確に認められる。益軒は、老子の言葉を引く形で次のように主張していた。「人の命は我にあり、天にあらず²⁴」。

彼によれば、「人の命はもとより天にうけて生まれ付²⁵」いており、その天の気を基にして生きている。その意味では、人身は命の根源である天地の気による生まれつきのものであるのだが、生まれた後の命の長短については、自分次第だというのが益軒の考えであった。つまり、天から受けた命がどのようになっていくのかは、わが身を養う「我」にかかっているということになる。したがって、養生を学ぶ人は皆、自らのこととして養生の「術」を学び、自らの責任で行為していくことが求められるのである。

ただし、ここで言っている行為主体としての「我」は、己の内に行動指針があるような自律的な個人ではない。先に言及したように、養生論が前提とする人身が、天地の気を命の源としているならば、生まれた後の養生もまた天地の気に範をとらなければならない。

陰陽の気天にあつて、流行して滞らざれば、四時よく行はれ、百物よく生る。偏にして滞れば、流行の道ふさがり、冬あたたかに夏さむく、大風大雨の変ありて、凶害をなせり。人身にあつても亦しかり²⁶。

天の気が絶えず流行していることで、季節がめぐり万物が生々されていくのと同じ原理で、人身も自らの気血をめぐらせることが不可欠である。そうしなければ、様々な病が引き起される。益軒は、呼吸や日常の身体動作、詠歌舞蹈などで気血をめぐらせよと説いている。

人の元気は、もと天地の万物を生ずる気なり。是人身の根本なり。人、此氣にあらざれば生ぜず。生じて後は、飲食、衣服、居処の外物の助によりて、元気養はれて命をたもつ。飲食、衣服、居処の類も、亦天地の生ずる所なり²⁷。

人身は、天地の気から生じたものであるが故に、身体内の気の調整が基本となる。気を養うためには、衣食住の助けが不可欠だが、それら衣食住もまた天地の気から成っている。益軒にとって、衣食住の養生は、物の気を人身の気に取り込んで一体化することであった。

これらが意味するのは、「物質的基体」としての気が天地間の万物を生々する、その活動に則って、一人ひとりが行為するということである。「術多し」と指摘される養生の「術」は、結局は天地の気を根源としたこの世界の循環に自らの気を合わせていくということに行きつく。養生の「術」を学ぶ人として想定されているのは、天地の気の一部としての自覚を持ち、その上で自らすべきことを行える行為主体なのである。

とはいえ、養生を学ぶ人すべてが、天地の気に則り適切に行為できるとは限らない。そのため、益軒は「其術をしれる人」に直接習うことが重要だと説いている。一人ひとりが

養生の「術」に精通した師に学ぶことで、天地の気のめぐりに即した行為ができると考えられているのである。

このように、無限にある養生の「術」は、気のめぐりに範をとることを基本とする。益軒の場合、天地から生々される物質的世界を前提にするからこそ、養生の多様な「術」に学問的関心が注がれていると言ってもよい。したがって、養生を学ぶ際に重要なのは、万物を生々する気の運動・変化そのものに目を向けていくということである。

『養生訓』巻六の「択医」という医学に関する項目の中で益軒は、良医に必要な心得として、医書を読むこと、古い医法や先輩名医の療法を知ることと並んで、「今世の時遷」「人の強弱」「土宜」「民俗の風気」を捉えることを説いている²⁸。

益軒は、古法を学ばずに今の状況に応じること、古法にとらわれて今の状況に合わせられないことも、いずれも固く戒める。どちらかに偏れば、治療法に誤りが生じ適切な治療ができない。そこで、良医がとるべきは、古法をよく知り、今の状況にも臨機応変に対処できる、「温故知新」の態度である²⁹。ここでは、権威ある医学的な「術」だけでなく、患者や病状の多様性、さらには時・場所の変化にも応じられる柔軟さが求められている。それ故、益軒は医者に対して、医の道に精通することと同時に、「工夫」することを強く主張する。医書の内容や目の前の病に対してよく考え「工夫」することがなければ、医の道に通じることはできないのである。

では、医の道を専門としていない、その他の人々はどうすればよいのか。益軒がまず求めたのは、医の「術」に精通し、臨機応変に「工夫」できる良医を選択することであった。「保養の道は、みづから病を慎しむのみならず、又医をよくえらぶべし³⁰」というように、自らの養生のためにも、父母や子や孫のためにも、医者 of 良し悪しを知って適切に選ぶことが必要だとされる。

だが、益軒は、良医を選んでその人に任せることだけを説いたわけではなかった。医学生でなくても、

略医術に通じて、医の良拙をわきまへ、本草をかながへ、薬性と食物の良毒をしり、方書をよんで、日用急切の薬を調和し、医の来らざる時急病を治し、医のなき里に居、或旅行して小疾をいやすは、身をやしなひ、人をすくふ益あれば、いとまある人は少し心を用ふべし³¹

と、医学的な概要を心得ておくことを求めているのである。

人はいつでも医者に頼れる状況にあるとは限らない。医者が来ない、医者 of いない所や旅先での不慣れな所に滞在しているなど、不測の事態はいつでもどこでも起こり得る。そうした事態に遭遇した場合、救急の薬の調合や一定の治療ができることは、養生にとっても、病人を救う上でも、重要なことだと益軒は注意を促す。

このように、医を専門としない人であっても、医の大略を知って実際に処置できる実践的な知識が求められている。したがって、ここでは、良医に臨機応変の「工夫」が必要とされるのとは違った意味で、医を専門としない人にもまた、その時々 of 状況に合わせた臨機応変の対応が必要だとされていく。なぜなら、医者ではない人は、治療に必要な道具や

薬草を持ち合わせていないため、対象者の状態や周囲の状況を把握しながら、限られた材料を駆使して治療にあたらなければならないからである。加えて、対処が必要な場所が、旅先などの慣れない土地であれば、なおさら速やかな状況把握や柔軟な思考・行動が不可欠となる。

益軒は、養生のために、こうした柔軟な行動を人々に求めた。医の知識は良医と比肩するほどとはされていないが、実際に治療に関わる以上、医者でなくてもその場で救急の対応ができるほどの行動は想定されていたと考えられる。こうした彼の発想は、武士のような身分の人や学を志す儒者とは異なる不特定多数の人々に、自ら「工夫」することの重要性を説いた思想として注目してよい。

以上、益軒の養生論における学びとは、一人ひとりが行為主体となって、無限にある養生の「術」を実践し、臨機応変に「工夫」して長命を実現することであった。養生のための理論と実践がまとめられた『養生訓』は、そのような学びを助ける書として世に出たと見なせる。養生を志す人は、益軒が示す教えにならって、自らの衣食住のあり方を工夫し、身体を養い、よりよく長く生きる努力をし続けることが求められるのである³²。

6 益軒養生論からの示唆

これまで、益軒の学ぶ姿勢と養生との関わりについて見てきた。そこから何が確認されるだろうか。ここでは非認知能力の議論を念頭に置きながら、四点ほど挙げておきたい。

一つ目は、益軒養生論が試行錯誤や創意工夫による育ちの思想的基盤になりうるという点である。既に確認したように、益軒が前提とする世界は、天地の気のめぐりによって構成される変化に満ちた世界であった。すべての人がその変化のうちに生きている以上、その時・その場に合わせた臨機応変の「工夫」が養生のために必要であった。益軒は、このような態度を、儒者や医者ではない読者一般にも求めたのである。

こうした各人の「工夫」する態度は、非認知能力の育ちを支える活動の一つであろう。非認知能力とのつながりが指摘されている保育所保育指針・幼稚園教育要領の「育みたい資質・能力」では、子どもが「身近な環境に主体的に関わり、環境との関わり方や意味に気付き、これらを取り込もうとして、試行錯誤したり、考えたりするようになる」学びのプロセスが欠かせないとされている³³。今後は、試行錯誤そのものの意味や子どもが試行錯誤できる環境づくりの検討が一層求められると予想されるが、益軒養生論は、そうした検討に対して重要な手がかりを我々に示すだろう。特に、試行錯誤の前提として、眼前に広がるこの世界に目を向けること、そこに存在するあらゆる物への関心を育てること、物の特性を固定せず、多様な側面に目を向けることなど、物の理解に向かう学びの姿勢を読み取ることができる。学びの基盤となるこうした姿勢が、非認知能力の重要な要素の一つにつながっていくと考えられる。

二つ目は、養生を実践する行為主体の重視である。養生は一人ひとりがわが身のために行為しなければ意味がない。それ故、養生に必要な知識をただ持っているだけでなく、そこから知り得たことを自らの身体で実践することが強く要請される。ここでは、知ることと行うことが両立してはじめて、各人の知的活動が成り立つと考えられている。

このように、知っていることを身体化し、実生活に生かすことは、非認知能力の育ちに

とって重要である。ヘックマンをはじめとする欧米の研究は、よりよい生き方のためには人生のはじめの段階で非認知能力を確実に育てることが不可欠だと指摘した。それは、人生で「生きて働く」実践的な知を幼いうちに育てなければならないということの意味する。保育・幼児教育では、園生活における子どもの活動を重視しているが、さらに視野を広げて、その活動が園外の人生にどう生きていくのかまで意識する必要がある。養生という人生全般にわたる実践理論を参照することで、乳幼児の主體的な活動の長期的な意味を捉える視点が得られると考えられる。

三つ目は、上記とも関連するが、益軒の養生論が提示する一人ひとりの主體的行為は、天地の生々活動の枠内において発揮されるということである。先に見たように、養生における行為者の主體的態度は、万物を生々する天地間の動きに則ってわが身を保つということの意味した。逆に、これが適切にできなければ、身体の健やかさや長命は実現されないのである。こうした発想において行為主体とは、自らの存在の根拠をよく理解し、その上で何をすべきかを把握し、実際に行動に移せる人を指す。ここでは、天地への理解や「物の理」の理解が、人としてとるべき行動と不可分となっている。

主體的行動や知と行の一致は、非認知能力に含まれる重要な要素だと言える。たとえば、「育みたい資質・能力」のうちの「学びに向かう力・人間性等」が教育の対象として明確に位置づけられていることからわかるように、子ども自身が学んだことを実行に移すということが、保育・幼児教育において求められている。だが、教育における主体性の中身を意味づけることは容易ではない。

これに対し、益軒養生論は、天地の気という主體的行為の条件や内容を明らかにして論を進めている。現代的な関心から言えば、益軒が論じる行為主体は、環境問題に対する非認知能力の可能性を示唆するのではないだろうか。今後は、自然環境における人としてのあるべき行為について、より議論を深める必要があると思われる。

四つ目は、ここで確認した養生論の特性すべてが、身体を大切にし、命を守ることを目的にしている点である。『養生訓』における数々の記述は、いずれもわが身の命を長く保つためのものに他ならない。養生の基本が、天地の気のめぐりと人身の気のめぐりの関わりにあるのも、天地と人身がつながっているという見方が前提となっているからである。

このことは、保育・幼児教育における重要な視点となるだろう。現在、人生の始まりの時期にある子どもの命をいかに輝かせるかということが、国内外で問われている。保育・幼児教育の世界でも、保育理念や内容に子どもの命の大切さを掲げ、その輝きを丁寧に読み取り、保育の評価につなげることが必要だと言われている。非認知能力は個々人のウェルビーイングを実現させる土台として注目されているが、その土台となるものの育ちを支えるとは、つきつめれば、こうした命の輝きを大切に育てることを指すと見てよい。そうした営みを積み重ねていくことで、子ども自身が自らの命を大切にする行為主体へと育っていくと考えられる。もちろん、日本の保育・幼児教育で重視されている子どもの命と、益軒養生論における「いのち」の違いについては慎重に検討しなければならない。だが、それぞれの特性に目配りしつつ、非認知能力が前提とするウェルビーイングの具体的内容について吟味することは、これからの保育・幼児教育にとって必要な研究課題となるだろう。心身の根本に立ち返り、何がその子を生き生きとさせるかを検討し、そこで明らかと

なったことを教育の基準とするのである。

以上のように、益軒の養生論からは、非認知能力の育ちに対する思想的基盤の一端が読み取れる。江戸期と現代との時代背景には留意が必要ではあるが、益軒養生論が提示する人身観と命の思想は、現代の保育・幼児教育における価値基準となりうるだけでなく、今後の課題をも指し示していると言えるだろう。

7 おわりに

保育・幼児教育では、非認知能力を育てるための活動をいかに充実させていくかが問われている。そのためには、こうした力の意義や価値基準についての広汎な検討が必要である。本論は、その一端となるべく、貝原益軒の養生論に目を向けてきた。

『養生訓』の記述は、必ずしも乳幼児に焦点を当てたものではない³⁴が、現代の保育・幼児教育において重視されている理念と関連する部分があり、子どもの育ちを考えるための手がかりとなり得る。

その中でもとりわけ重要なのは、養生論に通底している天地の気と人身の気とのつながりの思想であろう。人がよりよく生きるためには、命の根源と自分自身とを調和させることが不可欠である。非認知能力を育てる際には、そうした命のつながりを強く意識することが極めて重要になる。非認知能力のどの部分をどのように育てるかという具体的な問題は、そのつながりを基盤にした上で成立することであろう。

益軒は『養生訓』の中で、多様な「術」を暮らしの知恵として具体的に論じている。今後は、そういった具体的な知恵を検討することが求められる。その検討を積み重ねることで、非認知能力の育ちに何が必要かということが、明確に見えてくるのではないだろうか。

- 1 J.ヘックマン, *Giving Kids a Fair Chance*, Cambridge MA: MIT Press, 2013 (古草秀子訳『幼児教育の経済学』東京経済新報社, 2015年, OECD, *Skills for Social Progress: The Power of Social and Emotional Skills*, OECD Publishing (無藤隆・秋田喜代美監修, ベネッセ総合教育研究所編, 荒巻美佐子他訳『社会情動的スキル—学びに向かう力』明石書店, 2018年)
- 2 ヘックマンの知見も踏まえつつ、非認知能力の内容について調査研究したOECDでは、「目標の達成」「他者との協働」「感情のコントロール」を社会情動的スキルのフレームワークとしている。
- 3 遠藤利彦他「非認知能力(社会情緒的)能力の発達と科学的検討方法についての研究に関する報告書」2017年、『子ども学』第5号, 萌文書林, 2017年, 『発達』第170号, 2022年などが挙げられる。
- 4 中内敏夫他「シンポジウム<教育>の誕生 その後」『教育—誕生と終焉』(叢書 産む・育てる・教える 匿名の教育史1) 藤原書店, 1990年, 8-12頁
- 5 山田慶児『朱子の自然学』岩波書店, 1978年, 421頁
- 6 注5 前掲書, 420頁
- 7 辻本雅史「近世における『気』の思想・覚書—貝原益軒を中心に—」『近代日本の意味を問う』(知のフロンティア叢書2) 木鐸社, 1992年, 39-76頁
- 8 「大疑録」巻之上『全集』巻之二, 153頁。なお、本文は漢文であるが、適宜書き下し文にした。以下も同様に書き下し文にする。また、益軒の著作の引用は、『益軒全集』全八巻, 益軒全集刊行部, 1910-1911年からとする。表記する際は『全集』と略記し、当該巻数とページ数を表した。引用文の変体仮名は平仮名に改め、旧漢字は新漢字にし、略字・古字・異体字などは現行の字体にした。また、振り仮名は省略している。
- 9 「大疑録」注8 前掲書, 153頁。
- 10 荒木見悟「貝原益軒の思想」『貝原益軒 室鳩巢』(日本思想大系三十四) 岩波書店, 1970年,

- 467-491頁, 岡田武彦「貝原益軒の儒学と実学」『江戸期の儒学』木耳社, 1982年, 30-61頁
- 11 辻本雅史「『学術』の成立」横山俊夫編『貝原益軒—天地和楽の文明学』平凡社, 1995年, 147-148頁
- 12 「格物説」『自娛集』卷之七, 『全集』卷之二, 299頁。原文は漢文。
- 13 益軒の「物の理」に関する思想や, それを学問的なまとまりとして捉えた「物理之学」については, 辻哲夫「貝原益軒の学問と方法—『大和本草』における儒学と科学—」『思想』No.605, 1974年, 57-70を参照。
- 14 益軒の「物の理」の思想と儒者批判については, 辻本注11前掲論文を参照。
- 15 『慎思録』卷之一『全集』卷之二, 20頁。原文は漢文。
- 16 松村浩二「君子の知—益軒の『博学』をめぐる—」注11前掲書, 179-198頁
- 17 『養生訓』卷之一「総論上」『全集』卷之三, 477頁
- 18 注17前掲書, 486頁
- 19 注17前掲書, 486頁
- 20 注17前掲書, 210頁
- 21 『自娛集』卷之二「長生有術論」『全集』卷之二, 210頁。原文は漢文。
- 22 辻本注11前掲書, 166頁
- 23 『養生訓』卷之一「総論上」『全集』卷之三, 477頁
- 24 注23前掲書, 479頁
- 25 注23前掲書, 479頁
- 26 注23前掲書, 490頁
- 27 注23前掲書, 79頁
- 28 『養生訓』卷之六「択医」『全集』卷之三, 560頁
- 29 注28前掲書, 560頁
- 30 注28前掲書, 553頁
- 31 注28前掲書, 557頁
- 32 益軒の養生論における重要な概念に, 「楽」がある。この「楽」がなければ益軒が主張する養生は成り立たない。こうした養生と「楽」との関わりについては, 稿を改めて論じたい。
- 33 文部科学省『幼稚園教育要領解説 平成30年3月』フレーベル館, 2018年, 26頁
- 34 なお, 『養生訓』の中には, 「育幼」という独立した項目があり, 子どもの衣食についての留意点や子どもを外気にあたらせることの重要性が説かれている。

The significance of Non-cognitive Competence from the Viewpoint of the Theory of Regimen
by Kaibara Ekiken: A Study on the Growth of Infants and Young Children

Akiko Takano

Abstract

The concern with non-cognitive competence as the important element for young children has been growing in recent years in the field of early childhood education. But there is something unclear about the meaning and the characteristic of this competence.

So, this paper examines one end of the significance of non-cognitive competence in the field of early childhood education through the reference to the theory of regimen by Kaibara Ekiken (1630-1714). Especially, this paper draw attention to an attitude to study of Ekiken.

The study Ekiken's theory of regimen means the acquisition of all arts for health. Also, the regimen doesn't hold up if the learner put into practice what they have studied, each must practice and take flexible measures with every situation. The practical person whom Ekiken thought about, different an autonomous individual who have the guiding principle for the action in oneself, refer to the person who harmonize oneself the heaven that is the source of all life.

The attitude to study in Ekiken's theory of regimen is the clue to examine the significance and standard of value of non-cognitive competence through the study of the way and the idea of the each of regimen.